親子の問題　事例集（２）　～息子に先立たれた母と嫁～

前回につづき、多様化する親子関係の事例を取り上げてみたいと思います。今回の主人公は、都内在住で１年前にまだ働き盛りの夫を亡くした、東田純子さん（５１）です。

亡くなった夫・東田哲也さん（享年５３）との間に子供はありませんでした。純子さんは、パートの仕事と家事を両立しており、夫婦仲は「普通」だと思っていました。

そんなとき、夫が勤務先の健康診断で異常が発見され、かなり進行した癌だと診断されてから、８カ月という短い期間で生涯を終えてしまったのです。

妻である純子さんは、悲しみが襲ってくる前に、葬儀やその後の手続き事など、目の前のやらなければならないことの山にただただ茫然とするしかなかったのですが、関西地方にひとりで暮らしている哲也さんの母親・東田光代さん（８０）は、気丈に立ち振る舞う妻の純子さんを前に、泣き崩れるばかりでした。義母の光代さんは、３年前に夫に先立たれ、そして今度はひとり息子に先立たれので、その悲しみを思えば仕方ないと、純子さんはその時はそう思っていました。

ところが、亡くなった夫の遺品整理をしているとき。純子さんは、夫のスマホやパソコンのメール・手帳などから、数多くの夫の浮気の証拠を見つけてしまったのです。しかも特定の相手との交際は、最低でも５年に及んでいました。怒りに打ち震えても、その怒りをぶつける相手がもうこの世にはいない。

言っても仕方ないとは思いましたが、義母があまりにも頻繁に電話を掛けてくるので、耐え切れなくなった純子さんは、亡くなった哲也さんの裏切りを義母にぶちまけました。

しかし返ってきた言葉は、「一度や二度の旦那の浮気くらい。そんなことで騒ぎ立てるんじゃないよ。可哀想に、そんな嫁だから哲也は早死にしたんだ」と。

そんな中で、義母の光代さんに認知症の前段階のような症状がたまに出現するようになってきていたところ、光代さんが自宅前の段差で転倒して入院してしまったのです。光代さんには、夫も実の子供も既にいませんが、当然のように「長男の嫁」という立場の純子さんに、親族としての仕事が押し寄せてきました。

義母のわがままはエスカレートし、息子が亡くなったのがあたかも純子さんのせいだということを周囲にまで触れて回るようになる一方で、嫁だから世話をするのは当たり前という態度は変わりません。

次第に純子さんは、抑うつ症状に悩まされるようになりました。

結局、純子さんは、周囲のアドバイスどおり「死後離婚」という選択をし、それ以降、義母との親族関係を断ち切ることにしました。ただ、純子さんはその後の義母が困らないように、身元保証人などを引き受けてくれる業者との契約締結の支援をした上で縁を切り、しっかり義理は果たしたのでした。

つづく